

手話スピーチの成果を競う「こうべ手話フェスティバル」(同実行委員会など主催)が8月10日、神戸市中央区の神戸新聞松方ホールで開かれる。県内各地からの出場者を見込み、県レベ

ルでは初の本格的なスピーチコンテストだ。実行委の主要メンバーで神戸ろうあ協会会長の小川知子さん(57)に、フェス開催の狙いと手話に寄せる思いなどを聞いた。(聞き手・武田良彦)

手話は言語表現親しんで

こうべ手話フェスティバル 8月・松方ホール

こうべ手話フェスティバル開催への思いを手話で熱く伝える小川知子さん(神戸市中央区橋通3、神戸市立総合福祉センター)



おがわ・ともこ 2018年からNPO法人神戸ろうあ協会会長。同協会などの登録手話講師を務める。大阪府出身、京都の美術系短大で油絵を学んだ。1995年から神戸市北区在住。3人の男子の母親でもある。

実行委員、神戸ろうあ協会会長 小川知子さん(57)に聞く

「フェス開催が目指すものは。」「発表の内容や手の動きも重要に接していただくこと。手話を学んだら、顔の表情はもちろん、体全体でいる方は、コンテストに参加して上達のきっかけにしてほしい。手話を見ても、自分も学んでみようと思うかもしれない」

「上手な手話とは。」「2015年以来、手話言語学から個性が光る発表を目指してほしい」

光る個性、生きがい見いだす手段

例が相次いで制定され、現在では県内の半数以上の自治体に条例がある。手話への理解は深まったか。

「条例施行に伴い、自治体や聴覚障がい者団体などが、手話への理解と促進を願ってさまざまな啓発イベントを展開してきた。徐々にではあるが、成果は実感している。かつては、手話自体が奇異な目で見られたが最近はそのような。聴覚障がい者の支援学校では、当たり前前に手話が使われ、普通学校でも『総合的な学習』などで手話を学ぶ児童が増えている」

「どこかで手話を学んだ。」「生後間もなく病気で両耳が聞こえなくなった。幼稚園から小学3年までろうの学校に通ったが、手話教育は受けていない。『口話法』という相手の口の動きを読み取る学習が主流で、学校内では手話自体が禁じられていた。短大に進学、そこで、ろうの仲間と出会い、会話の中で覚えた」

「あなたにとって手話とは。」「手話は言語であり、その言語を使用する人口の多い少ないはあっても優劣はない。私にとっては生きて行くための言語であり、生きがいを見いだすための手段だ」